

音

～いい音を集めてみると～

3歳児

テーマ「音　～いい音を集めてみると～」

テーマの設定理由

子どもたちが日々の生活の中で、音に興味を持っている姿があった。飛行機が飛んでいると「飛行機の音。」と空を見上げ、その姿を探したり、園で工事が行われていると「なんの音？」とその音の出所を探して何が行われているのかを観察したり、いつもとは違う音が聞こえてくると、「何の音？」と興味を持つ姿が見られ、いつもとは違う音だけでなく、日常に溢れている様々な音に注目することで、子どもたちの新たな発見や学びに繋がっていくのではないかと考えたため。

活動スケジュール

1回目	太鼓の音	6回目	いい音探し（園外）	11回目	音の宝箱
2回目	色々な音	7回目	いい音を飾る	番外編	初めてへの挑戦
3回目	本物の音	8回目	持って帰れない音		
4回目	音を作る	9回目	音を録音する		
5回目	いい音探し（園内）	10回目	音を録画する		

1回目 太鼓の音



<探索活動>

きっかけの言葉：「太鼓やりたい。」

保育室の片隅に置いてあった段ボールを見つけると、「これ、太鼓になりそう。」ということに。次は「叩くものが必要」と一緒に製作の素材がしまっている引き出しがないを探し、「割り箸」を発見すると、「これ！ピッタリ。」とバチが決まる。すると「このままだと危ないから」と割り箸にビニールテープを撒き完成させた。

その段ボール太鼓を箱椅子の上に設置し、お祭りごっこがスタート。すると、「私も太鼓したい。」と次々に太鼓をやりたい子が現れ、テラスの玩具として置いてあった牛乳パック積み木などを太鼓に見立て始める。これがきっかけでお囃子隊に発展した。

<考察>

日頃から音に興味があった子どもたちだから友だちの太鼓の音やその楽しそうな姿に刺激を受け、「やってみたい」という気持ちになった子が多かったのだと考える。



2回目 色々な音

＜探索活動＞

きっかけの言葉：「もっといろんな音にしよう。」

太鼓の音にもっとバリエーションを増やしたいと、ミルク缶や玩具が入っていた箱や缶などを組み合わせて、ドラムセットのようなものを作り上げた。叩き方や素材の違いで音が変わることを楽しみ、パソコンで実際の太鼓を叩く動画を見ながら、叩き方などを研究する。



「これいい音するよ。」



「2個だといっぱい音が出る。」



「違う音面白い。」



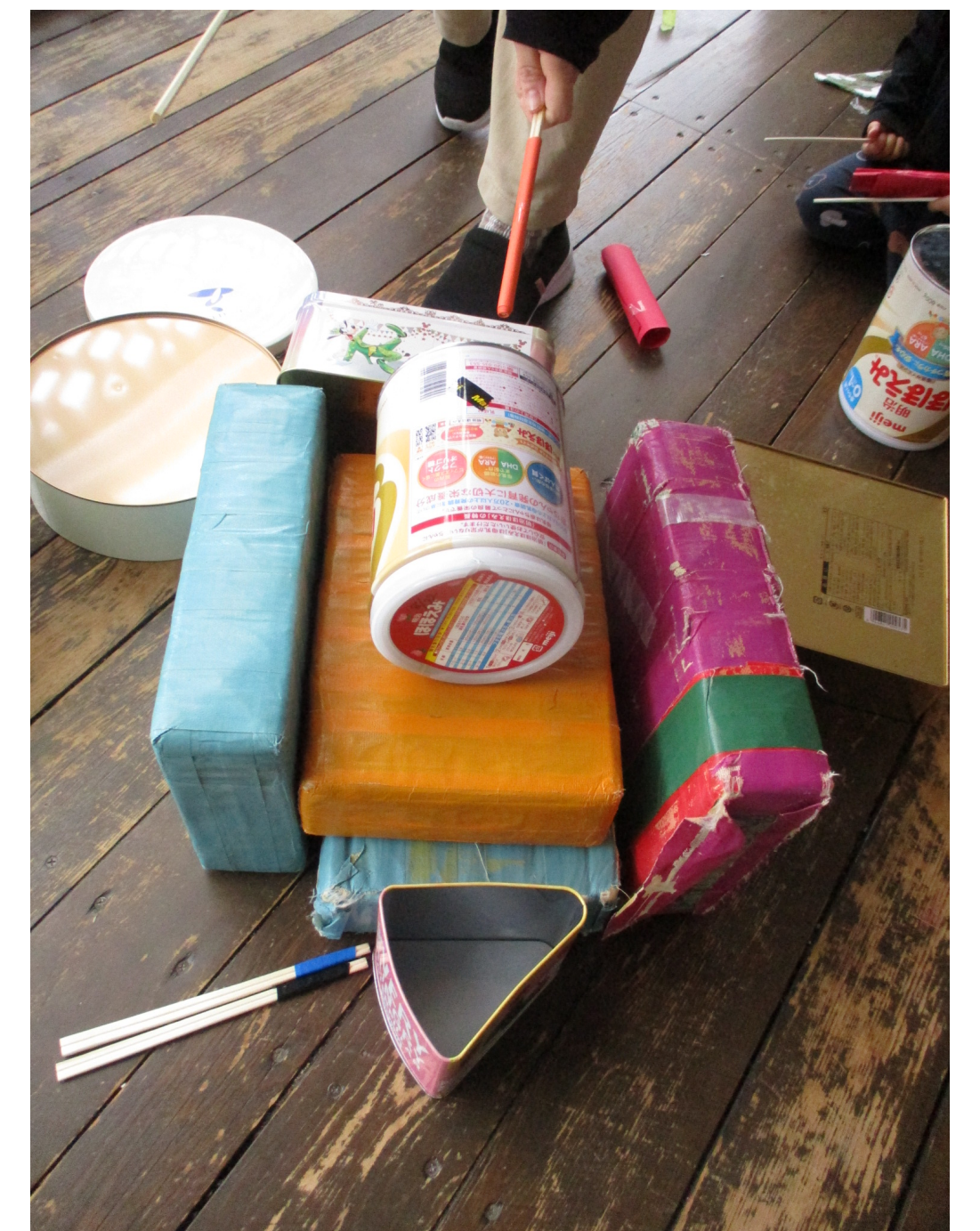
「手（でも音が出るね）。」



「いろんな音かっこいい。」



本物の音を確認



色々な音が出るドラムセット

3回目 本物の音



<探索活動>

きっかけの言葉：「本物の太鼓を叩きたい。」

環境構成：大太鼓、和太鼓、摺鉦、縦笛

本物の太鼓の音に「すごい！」と盛り上がる一方で、今まで楽しんできた自分たちの太鼓ももう一度作り始め、本物の太鼓の音とコラボレーション。本物の太鼓の音に合わせて自分たちの太鼓を叩いたり、より色々な音を出そうと太鼓を組み合わせる。



<考察>

前回パソコンで実際の太鼓演奏を見たことで、本物の太鼓への興味が生まれたのだと考える。太鼓の他にも、動画に出てきていた楽器にも興味を示し、様々な音を組み合わせることに面白さを感じたのだと考える。

4回目 音を作る



＜探索活動＞

きっかけの言葉：「音を作りたい。」

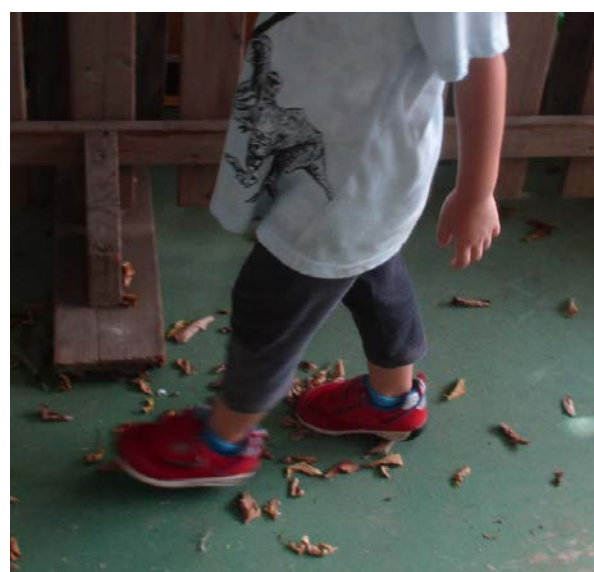
環境構成：紙皿、カップ、画用紙、ガムテープ、割り箸

今までは既存の素材を組み合わせ太鼓を作っていたが、「音を作りたい。」と言った子どもたちの思いは、音の出るものを「製作したい。」ということだった。どんな素材を使いたいかを相談し、素材を準備。いい音が出るようにするにはと素材の組み合わせ方を模索しながら製作が進む。同じ素材を使っても、作り方で音の違いが出ることが発見。また、叩く力加減や、擦るなどで様々な音が出ることを発見した。

＜考察＞

一人の子どもの太鼓の音への興味がクラスに広がり、子どもたちと相談しながら展開させることで、色々な音に触れ、音への興味がさらに広がり、自分たちで音を作ることへと活動が展開されたのだと考える。

5回目 いい音探し（園内）



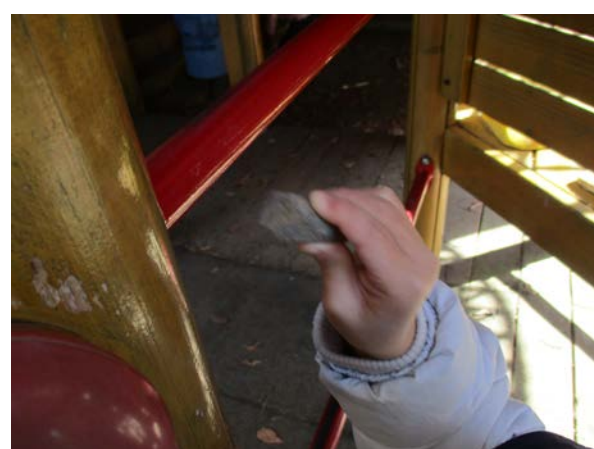
<探索活動>

きっかけの言葉：「いい音がするよ。」

太鼓から発展した音遊びを経て、子どもたちが日頃から音に着目する姿が増え始めた。

落ち葉が増えてきた頃には、不意に落ち葉を踏んだときに「いい音がする。」と気が付くと、落ち葉を拾って手で握ってみて音の違いを発見したり、箒で落ち葉集めをしているときの音から、集めた落ち葉にジャンプして音がするかを確かめてみたり、石で叩くといい音がする場所を見つけたり。

園内で音が出るもの、場所を探して遊ぶことが増えていった。



6回目 いい音探し（園外）



<探索活動>

きっかけの言葉：「もっといい音探そう。」

音を探すことへの興味が広がり、園外へと音探しに行くことになる。

丁度落ち葉がたくさん落ちている季節だったこともあり、散歩に出かけると、「いい音見つけた。」と落ち葉の上を歩いたり。どんぐりの上を歩くと不思議な音がしたり。石の上にジャンプして乗るとどんな音がするか試してみたり。



「色々な音があって面白いね。」と話す子どもたちの姿を見て、保育者が子どもたちに「音集めしてみる？」と提案してみたことをきっかけに興味は「音に触れる」ことから「音を集める」ことへと変わっていった。



「音を集める」一子どもたちはどのように考えているのだろうか問いかけてみると、「いい音がするものを拾う。」とのこと。そこから散歩のテーマが「音集め」になり、行き先は、どこに行けば「いい音」が見つけれられるのかになっていく。

<考察>

太鼓遊びを通して音への興味が広がり、様々な音がたくさんあることを面白いと感じるようになったと考える。「面白い」という思いを展開できたらと「音集め」を提案したことで音への興味がさらに深くなっていったのではないかと感じた。



7回目 いい音を飾る

<探索活動>

きっかけの言葉：「いい音飾ろうよ。」

いい音集めを始めると、見つけたいい音がするものを持って帰りたくなった子どもたち。一人ずつ袋を持ちながら「いい音」探し、音を確認しながら集めていく。帰り道に「先生、いい音飾ろうよ。」という提案があり、保育室の一角に「いい音コーナー」を作る。音を飾るという発想が出てきたことに驚きながら、どんなふうに飾るのか相談し、持ち帰ってきたいい音がどんな音がするのを確かめ、「かさかさ」「こんこん」「とんとん」「ふさふさ」の4種類の音に分類し、飾ることに。子どもたちは持って返ってきた「いい音」を一つずつ確かめながら、「これはとんとんだよ。」「これはかさかさじゃない？」と自分のいい音だけでなく、友だちの「いい音」にも興味を示しながら、全員のいい音を飾った。



<考察>

飾りたいという思いは、純粹に自分たちが見つけたものを見てほしいという気持ちからのものであると思うが、それが「いい音を飾る」という発想に繋がったことに感心した。音という概念を自由に考える姿に面白さを感じる。

8回目 持って帰れない音



<探索活動>

きっかけの言葉：「このいい音も持って帰りたい。」

いい音探しの中で、持って帰ることができない音がある。どうしたらこれを持って帰ることができるのか子どもたちと考える。「ママが携帯で撮ってくれる時、音があるよ。」という子どもの言葉から、レコーダーで音を録ってみることに。すると、子どもたちの音探しが、いい音だけでなく、面白い音、楽しい音、不思議な音へと広がり、自分の口、手、足を使って色々な音が作れることにも気がついていった。

<考察>

「音を飾る」に続き、「音を持って帰る」という子どもの発想から録音するという方法に辿り着いたことで、今までとは違った視点で音を探し始めることに繋がったのだと考える。子どもたちのアイデアを実現するために、それぞれの考えを出し合うことで新たな面白さを発見することができると感じた。

9回目 音を録音する

<探索活動>

きっかけの言葉：「携帯で撮ると音もあるよ。」

環境構成：レコーダー

レコーダーを持っでの散歩。園外に出る前からいい音探しが始まり、なかなか散歩に出れなかったが、これも子どもたちが興味を持って取り組んでいる証。園外に出るとすぐに駐車場のポールについている金具へと手を伸ばす。金属がぶつかり合う音を面白い音だと表現し、早速レコーダーで録音。録音した後はすぐにその音を確認すると、「これで持って帰れるね。」と喜び合う。その後、今までは気にも止めていなかったものや場所にいい音を探し、いい音を見つけると、グループ全員に伝え、みんなで確かめながら散歩が進んでいった。

<考察>

レコーダーという道具を使い、「音を集める」という共通テーマを持ったことで、子どもたちの視点が広がり、グループの一体感が生まれたと考える。



10回目 音を録画する



＜探索活動＞

きっかけの言葉：「なんの音だっけ？」

環境構成：デジカメ、パソコン

録音した音の鑑賞会をしていた時、「先生、これ、なんの音だっけ？」と音源が分からないものがたくさんあった。せっかく集めた音がなんの音か分からないのはつまらないという子どもたち。そこでもっといい道具はないか相談が始まった。「やっぱり携帯で撮ってくれてるみたいにすればいいんだよ。そしたら、わかるでしょ。」と動画を撮ることとなった。

後日、録画した音の鑑賞会をすると、「音が見えるの面白い。」と真剣に見入っていた。



<考察>

パソコンを見ながらの子どもたちとのやりとりから

保育者「音が見えるの？」

子ども「そうだよ。」

保育者「聞こえてるじゃなくて、見えてるの？」

子ども「ほら、今見えてるでしょ。」

保育者「なるほど。見えないと面白くない？」

子ども「だって、こないだ見えなくて分からなかったでしょ。」

子ども「なんの音か分からないと面白くないよ。」

子ども「こうやってるってわかるでしょ。」

子ども「ほら、先生も映った！面白い！」



子どもにとって、面白いという思いは視覚から得られているものが大きいのだと考える。音と物、音と人が一体となって面白さに繋がっているのだろう。面白いから可視化したい、だからどうしたらいいかを考える、それがまた面白さに繋がっていているのだと感じた。

11回目 音の宝箱

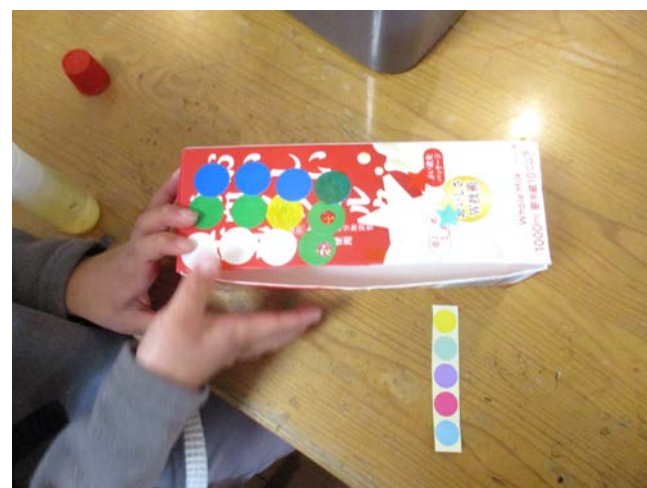


<探索活動>

きっかけの言葉：「大事なものを入れるのは宝箱。」

環境構成：牛乳パック、シール、モール、枝、マジック

音の鑑賞会が終わった後、「また音飾りしたいね。」という子どもたち。前回の「いい音コーナー」はすぐにぐちゃぐちゃになってしまったことを踏まえ、どうしたら良いかを話し合う。「ぐちゃぐちゃにならないように何かに入れたらいいんじゃない?」「みんなで見つけたから大事にしたいよね。」「大事なものを入れるのは宝箱じゃない?」ということで「音の宝箱を作ろう。」



11回目 音の宝箱



＜音をテーマにして＞

音は耳から聞こえてくるもの。でも子どもは音は見える方が面白いと感じる。視覚から得る面白さが子どもたちの探究心の根底にあるのだと感じた。音は単体ではなく、音と物、音と場所、音と人などが一体となることで面白さが生まれてくる。その面白いを形にするために、「やってみたい」ことが次々出て、それを一つずつ子どもたちと相談しながら形にしていくことで、音を楽しむ活動が広がっていったと考える。

「探究すること＝もっと面白く」という気持ちを子どもたちと共有していくことが活動の幅を広げ、保育を豊かにしていくのだと実感した。

番外編 初めてへの挑戦

<探索活動>

きっかけの言葉：「行ったことのない場所に行こう。」

いい音を探す散歩をする中で、「行ったことのない場所に行けば、新しい音があるんじゃない？」という声をきっかけに、いつもの公園でも今まで行ったことのない道を選択するようになった。中には、ここは道なのか？と思ってしまうほど険しい道のりもあり、その度に進むか戻るかを子どもたちと相談するのだが、どんなに険しい道を目の前にしても、子どもたちの答えは必ず「行く。」であった。その都度「こっち通りやすいよ。」「ここ、気をつけて。」と声を掛け合って、時には手を取り合って進んでいく。駅まで行く、知らない公園に行くなど、初めてへの挑戦は広がっていき、その度に、新たな面白さに出会った。いつしか、「初めてのことに挑戦すると面白いことがある！」が合言葉となり、音探しと同時進行するテーマとなった。

